OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『落窪物語』・現実への志向 : 衣の記述を視座として
Author(s)	鈴木, 麻里子
Citation	詞林. 2003, 34, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67504
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『落窪物語』・現実への志向

―衣の記述を視座として―

鈴木　麻里子

一　はじめに

『落窪物語』は、非常に現実的な物語として享受されてきた。「現実的な描写の特異さはきわだったもの」などの評が非常に多く、それは、女君への虐待が「裁縫」という実際的な労働であることや、継子物語でありながら他の物語のようには救済を実母の霊や神仏の力にまかせず、全てを人間の力によって動かしていくことなど、様々な視点からの指摘による。[2] 神仏の力などの「呪的」な力など、描かれてすらいないような印象を受ける。

しかしこれは、確かに『落窪物語』の正しい一面ではあるけれども、なぜこれほどまでに強く「現実的」との読後感を産むのかまでは説明されていないように思う。現実にありうることだけを並べて書いたからといって、それだけで目を見張るほど「現実的」な印象の物語が出来上がるわけではない。そこで今は、『落窪物語』の「現実」に対する志向を、どのような事件が描かれているのかというよりはどのような言葉が用いられているのか、そして本当に「反・現実的」なできごとは描かれていないのか、という点を足掛りに、明らかにしていこうと思う。中でも、衣の記述に注目する。表現の細部には、物語の構造に着目した時とはまた違う、物語の論理が表出されていると考えている。

二　『落窪物語』の記述態度―「縫い目」を中心に

『落窪物語』の女君は裁縫を得意とする。そのため物語には、裁縫行為を伴なう「衣」の記述が多く見られる。女君にとって裁縫行為は、虐待の具とも、賞賛の対象ともなる。ここでは、女君の縫い上げた衣がどのような言葉を用いて賞賛されているのかに注目することで、この物語の特徴をつかんでいこうと思う。

まず、女君が中納言邸で虐待を受けていた時期の衣への、賞賛記事を挙げる。女君が縫っていたのは、異母姉妹の婿の

衣ばかりであった。

この婿の君は、あしきこともかしがましく言ひ、よきことをばけちえんに誉むる心ざまなれば、「この装束ども、いとよし。よく縫ひおほせたり」と誉むれば、

（巻之一　二七頁）

これは三の君の婿、蔵人の少将による賛辞である。衣には布地の染めや織りなど他にも誉める要素があるにもかかわらず、「よく縫ひおほせたり」と、裁縫の見事さに限定して、衣を賞賛する。もっともこの賞賛の声は「あなかま、落窪の君に聞かすな。心おごりせむものぞ。かやうの者は、屈せさせてあるぞよき。」（同）と、北の方によって隠蔽され、女君の元には届かない。

「よし」と誉めし装束も、すぢかひ、あやしげにし出づれば、いとどことをつけて、腹を立ちて、しかけたる衣どもも捨て、「こは何わざしたるぞ。いとよく縫ひし人は、いづち往にしぞ」と腹立てば、

（巻之二　一六八頁）

これも蔵人の少将の言葉である。女君が中納言邸を去った後のことで、縫い方が悪くなったことだけを指摘し糾弾するこの口ぶりでは、先の発言を併せて見ても、彼が中納言邸で用意される衣に満足していたのがただ縫い目だけであったかのようである。たしかに、この時変化があったのは縫い手だけである。女君は裁縫に従事させられていただけだから、生地の質に変わりはない。蔵人の少将は、中納言邸に「落窪の君」という名の「もの縫ふ人」がいることを知っていたのだし、あえて縫い目に限定した発言も、特に奇妙ではないのかもしれない。それにもちろん、縫い目を誉めることがすべて不自然なわけではない。

北の方いまして、「ありつる袋はいとよく縫ひたり。遣戸あけたりとて、おとどさいなむ」

（巻之二　一一九頁）

女君に縫う事だけを強制した北の方が女君を誉める点など、縫い目以外にないからである。しかしそうではない場合、「縫い目」という些末な点にまで注目した賞賛あるいは非難は、本当に一般的な記述姿勢なのだろうか。

女君が染めなど衣の調製の全般に関わった場合にどう賞賛されるのか、確認していく必要があろう。それには中納言邸から救出されるのを待たなければならない。

かくて年かへりて、朔日の御装束、色よりはじめて、いと清らにし出でしたまへれば、いとよしと思して、着てあるきたまふ。御母北の方の見たまひて、「あなうつくし。いとよくしたまふ人にこそものしたまひけれ。内裏の御方などの御大事あらむには、聞こえつべかめり。針目などの、いと思ふやうにあり」と誉めたまふ。

（巻之二　一六七頁）

女君は、男君の母君から依頼を受け、衣を素晴らしく仕立て上げた。たしかに地の文では、その染織の見事さに触れられてはいる。しかし、物語内部の人物――ここでは男君の母

君――によって口にされる言葉はやはり、裁縫技術そのものへの賞賛に他ならない。母君は、女君に様々な染料も送っており、染色も女君の手によるということは誰よりもよく知っているはずである。それでも賞賛の言葉として語られるのは「針目」に限定される。先の、衣の縫い目だけに注目しているかのように描かれていた蔵人の少将の例と、ぴったり重なり合うと言えるのではないか。[3]

以上から、少なくとも『落窪物語』は衣の良し悪しを評価する時、縫い目に注目するのを奇妙と感じていないことが指摘できる。この姿勢は、当時の常識にも齟齬しないものなのであろうか。

では『落窪物語』以外で縫い目の美しさに言及される場面を見てみる。まず『源氏物語』鈴虫巻の例である。

御方〴〵より、我も〳〵といとなみ出でたまへる捧物の有様、心ことにところせきまで見ゆ。七僧のほうぶくなど、すべて大方のことどもはみな紫の上せさせ給へり。綾の装ひにて、袈裟の縫い目まで、見知る人は世になべてならずとめでけりとや。むつかしうこまかなることどもかな。（鈴虫　七二頁）

紫上が法服を調整した。『落窪物語』と同じく、衣は縫い目についても言及して賞賛されている。しかしその直後、「むつかしうこまかなることどもかな」とある。語り手は、縫い目のような細部に対する賞賛は「むつかし」いもの、誉めの視点としては通常でないと言うのである。そして、『枕草子』。

返る年の二月二十余日、（中略）桜の綾の直衣の、いみじうはなばなと、裏のつやなど、えも言はずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織り乱りて、紅の色、打目などかがやくばかりぞ見ゆる。白き薄色など下にあまた重なりたり。（中略）ありつる事ども聞えさすれば、「誰も見つれど、いとかう縫ひたる糸、針目までやは見とほしつる」とて笑ふ。（七九段　一四二頁）

清少納言は藤原斉信の美しかった様子を同僚達に語る。その観察の詳細さに、縫い目まで見通すものだろうか、と笑われる。が、その直前の観察描写に、縫い目への言及はない。もちろんここに記されていないだけで、実際には同僚たちに縫い目の美しさについても語っていたのかもしれない。しかしそれでもこの言葉は、縫い目まで賞賛するのが普通でない事を指摘するのに、十分であろう。

当時の衣装は、年々流行で型がかわるというほどのこともなく、寸法やまた衣の種類もほぼ決まっていたようなので、綾の模様や生地などにも関心は向けられていたが、何といっても色目に一番関心がむけられていたと考えられる。[4]

この伊原昭氏の指摘の通り、当時は衣の美しさと言えばま

ずその染めの色であり色の重なりであり、織の綾文の美しさであった。これは衣服が色彩、あるいは織りの名称だけで表現される事からも、当然に理解されよう。布地そのものの美しさこそ、衣の命だったはずなのである。さらに、『落窪物語』では縫い目のみが話題になっていたが、『源氏物語』の例でも『枕草子』の例でも、「縫い目まで」「針目まで」と、明らかに縫い目以外の何か――色や織りであろう――が前提として話題になっていたと分かるのである。『落窪物語』の人物たちがこぞって「縫い目」の素晴らしさだけを口にしていたのは、やはり少々特殊な視点であったと指摘するべきであろう。

その理由は、発言としては多少不自然でもあえて縫い目――女君の能力の象徴――に読む者の目を釘付けにさせようとする、物語の作為によると指摘する以外ない。登場人物達は、自然な言葉というよりは物語の意図に沿ったセリフを与えられていたのである。つまり、「縫い目」ばかりを褒めるのは本来不自然なはずなのだが、その不自然さを犯してまでも「縫い目」を誉めさせるのが、この物語の方法なのである。

二　衣服調製・贈与の「呪的」な意味
――『源氏物語』『蜻蛉日記』を題材に――

『落窪物語』には衣を縫ったり贈ったりする記事が多いのだが、この時代、衣という物質には物質以上の「力」、換言するならば「呪的」要素が広く認められていた。[5]『落窪物語』は非常に現実的な物語と認識されてきたが、それはそのまま、「伝奇的・呪的」な要素が全く描かれていないことを意味するのだろうか。この問いかけは、「現実的」という特徴を否定しようとするものではない。なぜそんなにも強く現実的な印象を与えられるのかを、明らかにしたいのである。中古の物語は呪的な作用を強く意識しつつ読み解いていくのが定石であるのだから、『落窪物語』についても「現実的な物語」との先入観を一旦捨て、こうした「反・現実的」な側面にも注目する必要があると考える。『落窪物語』に見える「呪的」な構造――衣を縫うことや贈ることに込められた意味、縫い手や贈り手の思い、縫った物や贈った物が引き起こした現象など――を、個々の事例に即して考えようと思う。先にも確認したが、この物語は読者への働きかけが強いようである。呪的表現にも、何か特徴があると予測する。『落窪物語』の特殊性を裏付けるためにまず、ほぼ同時代の作品の中で衣の調製と贈与がどのような意味を与えられどのように記述されているのかを確認する。

まず、縫う行為の意味から考察する。『落窪物語』や『栄花物語』の記述からは、衣を縫うという作業自体は雅なものと考えられていなかったらしいことが窺える。[6]しかし衣を用意するのは妻ならではの仕事との認識もあり、一概に貶められ

た仕事とも言い難い。[7] 摂関の時代には、権門盛家の子女が御匣殿の別当に就く事は入内のための一段階とも言えるようになっている。実際に彼女たちが針と糸や続飯を持って作業に当たったかどうかは別にして、衣服を調製するのが妻の仕事であったことと無関係とは言えまい。[8]

『蜻蛉日記』の作者道綱母も衣服調製を得意とした。日記は兼家からの調製依頼とその拒絶・承諾の様子を繰り返し描き、その時々で揺れ動く夫婦間の距離を浮き彫りにする。

とばかりありて、「方塞がりたり」とて、わが染めたるとも言はじ、にほふばかりの桜襲の綾、文はこぼれぬばかりして、固文の表袴つやつやとして、はるかに迫ひちらして帰るを聞きつつ、

（下　三一〇頁）

道綱の母にとって素直に依頼を受けることとは、実用的な妻に成り下がるのを受け入れる、諦めの行為でもあった。それでも、自身の手により素晴らしく仕上げられた衣を纏う夫の姿をじっと見、帰って行く声にも意識を凝らしている様子には彼女の妻としての自負が窺える。[9] 彼女の意識は自ら縫い上げた夫の衣に付着して、移動していくかのようである。

物語では、裁縫を得意とする女君に『源氏物語』の花散里と紫の上がいる。花散里は妻として源氏の衣装を用意するだけでなく、夕霧の親代わりとして衣服を調製する事も多い。それらの記述からは非常に素朴で温和な、家庭内の季節の行事といった印象を受けるばかりで、それ以上の呪的な意味を見出すべくも無い。花散里の場合、裁縫場面の機能はごく単純で、妻としての能力を描くためにある。では、紫の上はどうか。

紫の上の裁縫技術が賞賛される場面は多いが、それらの多くは花散里の場合と大差ない。しかし、様子の異なるものもある。それは、先にも注目した、賞賛のされ方による違和感である。

七僧のほうぶくなど、すべて大方のことどもはみな紫の上せさせ給へり。綾の装ひにて、袈裟の縫ひ目まで、見知る人は世になべてならずとめでけりとや。

（鈴虫　七三頁）

七僧のほうぶくなど、品〴〵たまはす。物の色、ぬい目よりはじめて、きよらなること限りなし。

（御法　一六三頁）

縫い目まで褒められるのは、これら法服調整の折のみである。この時の衣は自分と仏を結ぶ物としてあり、出家を許されない紫の上の、仏への強い帰依の心が込められて縫い上げられている。[10] 衣が縫い目にまで注目されるという特別な記述がされている今、この衣には特別な意味――縫い手が一針一針にこめた思い――が付随している、と考えることが出来るのではないか。そして先の『蜻蛉日記』の例も考え併せるならば、特別な記述を持つ衣には特に強く「製作者」の思いが付随するものと言えそうである。

御匣殿に仕うまつれるも、此方にせさせ給へるも、みな取り出させ給へり。（中略）上も見給て、「いづれも劣りまさるけぢめも見えぬ物どもなめるを、着給はん人の御かたちに思よそへつゝたてまつれ給へかし。

（玉鬘　三六七頁）

歳末の衣服贈与のために衣を選ぶ時、御匣殿で用意された衣と紫の上が製作した衣とがともにその場にあった。それを当の紫の上が「いづれも劣りまさるけぢめも見えぬ物どもなめるを」と言う。もちろんこれは、色などに本来的に備わっている優劣関係を無化しようという意図での発言とも考えられる[11]。しかしそれだけでなく、すべての衣を物質として同価値と評する手続きが製作者である紫の上本人によってされなければなかったとするならば、やはり衣には製作者にしかうち消すことが出来ない何か――製作者の心――が付随していると読むことができるのではないだろうか。

このように、衣の製作に製作者の心――情念――を読むことは可能であり、むしろそういった呪的な構造が、心の深淵を浮き上がらせる積極的な役目を持っているのである。

次に、衣を贈ることの意味について確認していく[12]。特に『源氏物語』には、松井健児氏のこのような論がある[13]。

折口が古代信仰を説くさい、しばしば用いる語に「みたまのふゆ」がある。（中略）「みたま」は霊の力、「ふゆ」はその増殖、あるいはその分裂物を言い、古代天皇は増殖した霊威を衣を通して臣下に分与する。その遺習が「衣配り」であるとするのである。折口説をここに媒介すると、歳末の衣の贈与とは、光源氏からその女性たちへの精神的な力の分与としての性格がうかがえてくる。それはそのまま、古代天皇の持つ呪的な支配構造の喩的表現としても機能し、またこうした儀礼的行為を媒介とした光源氏の古代性の表象としてもそれは読みえなくもない。

王権論にも通じる、非常に強い呪的構造を認め得るのである。もちろん、王権とは殆ど関わりのない一貴族の生活を描く『落窪物語』の読みに、『源氏物語』と同質の王権論を持ち込むのは御門違いである。さらに松井氏も「ただ、そうした精神的な側面のみによって、こうした衣の贈与一般を捉えるのはやはり十分とは思われない。平安期の衣の贈与には経済的贈与の側面が一方にあることも否めない[14]」と指摘する。しかしそれでもこの「衣服贈与」という行為に、行為以上の内的な意味が多分に付与されているという事実は否定できないのである。またこれを拡大して考え、衣が個人からではなく家から贈られる場合は、家からの支配あるいは取り込みの意図を指摘できるだろう。そして未摘花の衣服贈与の例からは、衣という物質に家の由緒・伝統とでも換言できる呪的意味を付着させ贈る、ということも指摘できる[15]。

衣に「精神的な力の分与」、また「呪的な支配構造」を見るのは、身体を包み込んで守るという衣の持つ本来的な意味にも帰着できよう。思えば、かぐや姫は天の羽衣を着せられた瞬間、「翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せ」（『竹取物語』七五頁）てしまった。天の羽衣は天人の支配の力が実体化した物であり、かぐや姫はそれに包まれる事で天人支配の磁場に取り込まれてしまったのである。また、形見として不死の薬を置いて行こうとする時「脱ぎ置く衣に包まむと」（『竹取物語』七四頁）してもいた。どちらも、衣の民俗的・呪的要素を色濃く映し出した例であったと言えよう。

以上から、衣を贈るという行為には、「経済的援助」の意図のみならず、贈る側の「力の分与」、「支配」、「取り込み」、「由緒の付与」等の意味が付されていると考えられる。

三　『落窪物語』の衣服調製・贈与の呪的な意味と、記述態度

さて、『落窪物語』での衣の呪的要素はどのように描かれ、また描かれないのか。まず「縫う事」に注目する。中納言家に閉じ込められていた時、女君が縫わされていたのは、異母姉妹の婿たちの衣などであった。中納言家からしてみれば、衣を贈ることで婿君を取り込むのに成功しているのである。その後、女君は中納言家から連れ出される。当然、蔵人の少将の衣の縫い手は、女君ではなくなった。

やがて蔵人の少将は、衣の出来が悪くなったことに腹を立て、中納言邸に距離を置き始める。これでは、蔵人の少将を中納言家に繋ぎ止めていたのがまさしく「女君の縫った」衣だったのだと示すようである。しかもこの後、蔵人の少将は男君の妹・中の君と結婚し、中納言家には完全に足を向けなくなる。中の君との結婚の時、彼の衣装を縫うのは、今は男君のもとにいるかつての「落窪の君」である。つまり衣の縫い手に注目した時、蔵人の少将は事実については何も知らないながら、女君の影響下に戻ってきたと見ることができるのである。女君の縫った衣が持つ引力の作用によって蔵人の少将が移動した、と読めるだろう。

次に、贈られた衣に注目する。

帰りたまひて、北の方に、「落窪をさしのぞきたりつれば、いと頼み少なげなる。白き袷一つをこそ着てゐたりつれ。子どもの古着やある。着せたまへ。夜いかに寒からむ」（巻之一　二六頁）

白き衣の萎えたると見ゆる、着て、掻練のはり綿なるべし。腰より下にひきかけて、側みてあれば、顔は見えず。（同　三六頁）

どちらの場合も、女君の衣は惨めであった。ところが、中納言が覗き見た時と男君が垣間見た時とには、女君の衣に少々違いが見られる。それは「はり綿」の存在である。

婿の少将の君の表の袴、縫はせにおこせたまふとて、「これはいつよりもよく縫はれよ。緑に衣着せたてまつらむ」とのたまへるを聞くに、いみじきこと限りなし。いととく清げに縫ひ出でたまひつれば、北の方、よしと思ひて、おのが着たる綾のはり綿の萎えたるを着せさせたまへば、風はただはやになるままに、いかにせましと思ふに、少しうれしと思ふぞ、心地の屈しすぎたるにや。

（同　二六頁）

中納言は北の方に「子どもの古着」、他の娘たちのお下がりを与えることを提案した。しかし北の方が実際に与えたのは、自分の古着である。北の方は女君に衣を与えるにあたり、夫の言葉に忠実には従っていないのである。このズレが意図的であるとすれば、そこに何か北の方の思惑を読み取ることができるのではないか。

北の方は、自分の娘たちを大切にかしずいて育てている。溺愛する娘たちなのだから、北の方は中納言家で考えられる限りの贅沢で美しい衣を与えていたことだろう。だからいくら古着とはいっても、継子の女君に大切な娘たちと同じ衣装を与える、同列に扱うようなことはしたくなかったのではないか。それに、年齢に合わない衣を着用するのは恥ずべきことであった。北の方はそれも承知で、娘たちのではなく自分の衣を女君に与えたと考えられる。

また衣を、北の方から女君に対する直接的な支配力を実体化した物、と捉えることもできる。源氏が女君たちに対して支配の意図を示していたのと、同様である。北の方にしてみれば、自らが着用していた衣はそれだけで女君への上等な「下賜品」なのである。

しかしその呪縛は、救い主（＝男君）の強い力の前に無力であった。北の方が縫い物の様子を窺いに行った時、美しい男君の前にその場では何もできず退散したように[16]、北の方からの一方的な呪縛である衣も、この救い主の前では何の力も持てなかった。どこに押しやられてしまったのか、初めての逢瀬の後、このはり綿について触れられることはない。

少将、起きたまふに、女の衣をひき着せたまふに、単もなくていとつめたければ、単を脱ぎすべし置きて、出でたまふ。

（同　四三頁）

男君は帰り際、女君のもとに自分の着ていた衣を置いていく。これは後朝の場面でもあるから、衣の交換が描かれるのは当然かもしれない（もっとも、女君には差し出すべき衣が無く交換は成立しない）。新枕にあたって、女君は「単衣はなし。袴一つ着て、所どころあらはに、身につきたる」（同　四一頁）という自身の姿に、「涙よりも汗にしとど」（同　四二頁）となる。女君にとって、みすぼらしい衣を見られることこそが最も恥ずべき事態だった。そしてこの時受け取った単を、女君はその後も身に纏う。衣の「身体を包み、守る」という側面に注目したい。二日目の夜、姫君が身に纏っていた衣装はあこき

が差し出した袴、あこきが叔母に送ってもらった衣、そしてこの単であった。

今宵は、袴もいと香ばし、袴も衣も単もあれば、例の人心地したまひて、男もつつましからず臥したまひぬ。今宵は、時々御いらへしたまふ。いと世になう、あるまじうおぼえたまひて、よろづに語らひたまふほどに、夜も明けぬ。（同　五二頁）

昨日は北の方の衣に縛り付けられていた女君が、今日は頼りになる侍女と男君からの衣装――彼らの力が実体化したもの――に、守られている。守られて、彼女の心は自由である。男君は、前日と違い少し打ち解けて話す女君をよりいとおしく思ったというのだから、この衣たち、つまり守護の力が二人の絆を深めたと言っても過言ではない。

そして、数々の報恩の中でも衣は贈られ続ける。衣を与えない事で女君のことを支配してきた北の方に対し、女君はひたすら衣を贈り続ける。豊かで心優しい女君は、誰に対しても衣を与えていると記されているような印象を受けるのだが、実際には、あこきや義兄が都を離れる際の餞別にすら衣を含めない（少なくとも、物語は記そうとしない）など、衣に限り、贈る相手を強く限定して描いているのである。女君が衣を贈るのは、北の方とその周辺の者（＝三の君・四の君）に対してだけである。衣に支配の力の実体化という呪的側面を考えた時、物語は、その鮮やかな逆転をしてみせるのである。

四　『落窪物語』の現実への志向

以上から、『落窪物語』にも呪的な構造が存在することは明らかである。しかしそれにも拘らず、読む者はこの物語に呪的な要素に眼を留めることは殆ど無く、現実的な印象ばかりを強く持つ。

そこで、先に呪的構造が見られると指摘した様々な例について、もう一度考えてみたい。まず、虐待期に女君が衣を縫うことについてである。先に引用した蔵人の少将の表の袴を縫う場面では、寒さをしのぐための衣が欲しいがために、この袴という「物質」を早く仕上げようとしていることが明記されていた。裁縫は、明らかに自分のための「作業」なのである。女君は、この袴が与えられる相手も、それがどう見られどう機能するかも、全く意識していない。

「この下襲もただ今縫ひたまはずは、ここにもなおはしそ」とて、腹立ちて、投げかけて立ちたまふに（中略）女、あれにもあらで、物折る。（巻之一　八四頁）

「腹立ちたまふを見るが、いと苦しきなり」とて、なほ縫ふに、（同　九七頁）

ここでも女君が衣を縫う時に思うのは、贈られる相手のことではない。女君が衣を縫うのは、自分が褒美を得るため、自分が叱られないため――自身の現実的な保身の為――だっ

たことが、律儀にも明記される。

中納言邸から救出された後の蔵人の少将の衣を縫う場面では、確かに縫う時の心は「むかし思ひ出でられて、あはれ」（巻之二　一七九頁）と言及される。しかし結局、その直後の母君からの手放しの称賛によって、読者の視線は女君の内面に至る前に逸らされ、意識のほかに放置されてしまう。先に確認した通り、その賞賛ためには多少不自然かもしれないような言い回しでも用いてしまうなど、物語の読者への積極的な働きかけ――注目点設定――の意図が明らかであった。また今回は、道綱の母のような衣の製作者としての目を持つ機会は与えられているはずであった。しかし作者はそうした視点で描こうとはせず、ただただ能力を賞賛するのみである。

北の方側へ贈られた大量の衣に、支配構造の逆転を見ることができると指摘した。しかし、北の方は「喜ぶこと、さすが限りなし。「人は生みたる子よりも、継子の徳をこそ見けれ。…」」（巻之四　三三五頁）などと、大げさに感じられるほど喜ぶ。衣を受けることによって生じるはずの支配云々の構図には、全く気付いていないかのように描かれるのである。これも物語が、経済的援助の側面にのみ光を当てようとしているためであろう。物質的・経済的な援助には手放しで喜んでしまう北の方の前に、存在するはずの呪的支配構造の皮肉は表面化されず、回避される。衣の着用者蔵人の少将も男君の権力に媚びるばかりで[17]、内面的な心理作用を読み取るべくもない。そしてそれらの現実的・物質的な記述が、呪的に読みうる記述の直後に必ず置かれる事にも、注目をしたい。

『落窪物語』は内部に呪的な要素を孕んではいるものの、そういった場面の直後に呪的作用を上回るほどの現実世界の力――物質、財力、権力――を手放しに称賛する一言を、付け加える。この一言こそ、物語から読者への、衣が持つ呪的な作用に目を向けないようにするための働きかけなのである。『落窪物語』において衣を贈ることとは、贈り手の人間らしい心の発現を描くためでも、呪的な側面を描くためでもなく、ひたすら物質的な贈与を描くためにあるのである。

物語は、あくまでも現実世界での成功の物語を描くことを目指したのだろう。古代信仰的な力から読者の視点をずらす、つまり現実的な力に注目点を設置するという操作を、繰り返し、意図的に行なっているのである。呪的な要素をほのめかされながらも現実賞賛主義の言葉で敢えて覆い隠されることで、読者は現実的なその力をいっそう強く印象付けられる。これが『落窪物語』の現実に対する意識であり、「話術」であると言えよう。

五　おわりに

現実的であるという『落窪物語』にも、呪的な要素が見られることを明らかにした。しかしそれらは律儀にも全て、「現

実」の力に覆い隠されていくのである。他の物語では神仏の力、あるいは人の思いが介在するであろう場面を敢えて設定し、しかし実際には現実的な方法で解決、進行させる。『落窪物語』はこの設定と実際のギャップを利用することにより、現実的な力をより強く効果的に表現するのに成功しているのである。『落窪物語』の、伝奇的・呪的な要素を否定する意志と現実を強く肯定する意志とが、ここに読み取れる。

たしかに記述そのものは、時に大げさであったり、現実には用いないであろう表現を用いてしまってもいた。これは、子どもが何かを誤魔化そうとし、却って不自然なほど饒舌になってしまうときのような、稚拙な方法であるのかもしれない。ではあるが、読む者の目を意図した点――それが、人の思いなどではなく現実・物質である――に注目させようとする物語の意図がはっきりと現れているのであり、非常に注目すべき態度であると考えている。

注

(1) 高橋亨氏「落窪物語」(『体系物語文学史第三巻　物語文学の系譜Ⅰ』三谷栄一編　有精堂S58・7)等。

(2) 野口元大氏「落窪物語論おぼえ書」(『日本文学』8-4号S34・4)、日向一雅氏「落窪物語―現実主義の文学意識―」(『論集中古文学　初期物語文学の意識』笠間書院S54)等。

(3) 視点はやや異なるが、熊坂恵美子氏「落窪物語の研究―物語の展開と「縫ふ」ということをめぐって―」(「百舌鳥国文学」第15号H15)にも、母君からの評価姿勢への言及がなされている。

(4) 伊原昭氏「『源氏物語』の象徴的色彩観」(『平安朝の文学と色彩』中公新書S57)一四四頁。

(5) 後朝や餞別に衣を交換したり、恋しい相手を夢に見るために衣を裏返して寝るなどの習慣。

(6) 若くめでたき人は、多くかやうのまめわざする人や少なかりけむ、あなづりやすくて、いとわびしければ、うち泣きて縫ふままに、　(巻之一　一九頁)

大宮には、姫宮の御贈物何やと、よろづをかき集めいそがせたまふ。あるかぎりの女房、おぼろけならぬは皆仕うまつり、今は年など老い、宮仕などもの憂くて里にゐたるは、このごろ御前のまめわざに参りなどしてなんさぶらひける。　(『栄花物語』巻十九　御裳ぎ　三三〇頁)

(7) 岩佐美代子氏の「夫の衣服の調整は妻たる者の義務であると同時に、いわゆる「召人」クラスの愛人には手の出せぬ、妻の特権であった。廷臣の装束が妻方の責任で調えられるという事は社会通念として定着しており」(「「我が染めたるとも言はじ」―蜻蛉日記服飾表現考―」(『王朝日記の新研究』笠間書院H7)という指摘による。また、畑恵里子氏も「落窪の君の裁縫行為」(『日本文学』52号H15・3)でこの点に注目した考察をしておられる。

(8) 河添房江氏「『蜻蛉日記』の歌・衣・性―歌う女／縫う女の〈物語〉―」(『日本文学』45-5号H8・5)に、当時の裁縫の方法が挙げられている。

(9) (7) 岩佐氏先掲論文。「自らの裁量のもとに織立てさせた、その布地の出来栄えを誇らしげに見定める制作者のまなざしであ

り、「我が染めたるとも言はじ」と相伴なって、妻ならでは味わえぬ生活の中の満足感を如実に表現している。」

(10)三田村雅子氏「衣を贈る／衣を縫う」（『源氏物語感覚の論理』有精堂H8・3）。

(11)伊原昭氏「王朝びとの色彩への感情」（『平安朝の文学と色彩』中公新書S57）六二頁。

(12)先と同様、文使いに対するかづけ物などの例については考察対象から外す。これらは、衣を贈るという行為がただの慣例や経済的な贈与でしかないことが明らかだからである。

(13)松井健児氏「『源氏物語』の贈与と饗宴」（『源氏物語の生活世界』翰林書房H12）。松井氏の言う「衣配り」とは、歳末に行われる新年のための衣服贈与である。しかしこの語は近世になってからの語であるので用いるのを避け、以後は「衣服贈与」と表現することにする。これは歳末に限らず、衣服の動き全般に等しく注目するためでもある。

(14)(13)松井氏先掲論文。

(15)佐伯雅子氏「末摘花と衣の贈与」（『叢書想像する平安文学第一巻〈平安文学〉というイデオロギー』勉誠出版H11・5）、長谷川政春氏「〈唐衣〉の女君―末摘花」（『中古文学研究叢書4物語史の風景』若草書房H9・7）。

玉鬘の裳着にと衣を贈ってきた末摘花に対し、源氏は「かく物づつみしたる人は、引き入り沈み入りたるこそよけれ。さすがにはぢがましや」（行幸　七七頁）と怒りをあらわにする。もし当代的な美的センスを持たないことへの不満だけであるのなら怒りまではしないだろうから、源氏は末摘花の行為に物質贈与以上の意味を感じ取り、それに反発したと考えられる。それこそ衣に附随した「家」の由緒――それは、どうしても源氏が持つことのできないもの――であると読み取れる。

(16)女、こなたのかたに後ろを向けて、持たる物を折る。向ひて控へたる男あり。なま寝ぶたかりつる眼もさめ、おどろきて見れば、（中略）またなく思ひいたはる蔵人の少将よりもまさりていと清げなれば、心惑ひぬ。（巻之一　九六頁）

この後、北の方は自室に戻り、悔しさに眠れない夜を過ごす。

(17)（男君は）（蔵人の）少将にあひて、「『いと恐ろしき人持たまへり』と、おぢきこえたまひしかど、間近くて聞こえ語らはむの本意ありてなむ、しひてそのかしきこえたるを、わりなくとも、ゆめ、もと一つに思すな」と聞こえたまへば、少将、「あなゆゆし、よし、聞きたまへ。文をだにものしはべりてむや。『御用意あり』とうけたまはりしよりなむ、限りなく頼みきこえし」とのたまひて、（巻之二　一八〇頁）

『落窪物語』の引用は、新編日本古典文学全集に拠った。ただし表記を私に改めたところがある。他作品の引用については、『竹取物語』・『蜻蛉日記』・『枕草子』・『栄花物語』は新編日本古典文学全集に、『源氏物語』は新日本古典文学大系にそれぞれ拠った。

なお、本稿は平成十四年度修士論文として提出した論に修正を加えた物である。

（すずき・まりこ　本学大学院博士前期課程修了）